

「人類とカビの歴史」～闘いと共生～

浜田 信夫 著

単行本, 241ページ, 定価1,400円+税
(朝日新聞出版, 2013年6月25日発行)

著者の浜田信夫博士は、本学会の会員でありご存知の方も多いことでしょう。室内環境に関わるカビ研究の大家であり、生活者に身近なカビの生態やカビ汚染被害に関する論文を数多く発表されています。本書は、著者のこれまでのカビ研究の一旦とカビへの限りない興味(愛情?!)が凝縮された玉書です。

本書は5章から構成されており、各章のタイトルとは以下の通り。

第1章「カビとは何か」、第2章「食品とカビ」、第3章「住居とカビ」、第4章「カビと健康」、第5章「カビと人の関わりの変遷」。

1章ではカビの分類上の位置、基本形態と生態について平易に解説しています。カビと同じ菌類でも、全く形態が異なる粘菌と地衣類(地衣菌と藻類の共生体)についての話は一般読者は新鮮に感じることでしょう。2章では食品汚染に関わる有害なカビとチーズなどの食品製造になくてはならない有用カビについて、事例をまじえて解説しています。ホテルで製造したケーキやミネラルウォーターのカビ発生事例はとても興味深い事例です。また、餅に生えるカビ、鰹節とカビ、日本酒とカビ、ワインと酵母の話は我々の実生活に関わりが深い見近なカビの話で、読者が「なるほど」と納得されることでしょう。3章は著者の得意分野である住居のカビ問題について、一番多くページを割き(75ページ)、「洗濯機」、「エアコン」、「浴室」、「居間」、「結露とカビ」というようにそれぞれの項目について具体的な事例とともに紹介しています。著者を一躍有名にした洗濯層のカビ問題は、2002年5月8日に朝日新聞の夕刊一面<アトピーの犯人洗濯機のカビ?>に掲載されました。書評の筆者(川上)は、この記事をきっかけに、(株)日本電気工業会洗濯機部会から依頼を受け、全メーカーの洗濯機の現状調査と洗濯層の除菌試験を行いました。本文を読みながらその時実施した調査や実験の光景がよみがえりました。4章ではカビ毒、水虫(白癬菌)、アレルギーなど「カビの人への健康影響」と感染症から人類を救った「抗生物質ペニシリン」につ

いて解説されています。特に、ペニシリンの誕生秘話から抗生物質(医薬品)として、改良を重ね、それまで完治が困難であった感染症から人類を救う救世主となった経緯は読者を引き込みます。その淡々と語られる文章は「NHKのプロジェクトX」を彷彿とさせるものでした。5章ではカビの起源からはじまり、人類誕生とともに人間のライフスタイルに合わせてカビと人間との関係が生まれた経緯がとても興味深く紹介されています。「水回りのカビのルーツ」、「白癬菌のルーツ」、「南極と砂漠のカビ」など、大変面白く読ませていただきました。

文中、「私たちの身の回りのカビについては、意外にもカビの専門家はこれまで調べてこなかった。<中略>実際に調べてみると、身の回りのカビは、身の回りの環境に適応したカビであり、野外のカビとは異なるカビであった。」と著者は述べています。室内環境中のカビを研究する方は同感と思われることでしょう。また、共通性もあると。

本学会の会員で、これからカビの研究にも着手したいと考えられている方にはカビの入門書としても推薦したい好適な一冊です。



(株式会社エフシージー総合研究所
環境科学研究室 川上 裕司)